

記述方言地理学の理論的基礎

江 端 義 夫

(1983年9月10日受理)

Theoretical Foundation of a Descriptive Dialect-Geography

Yoshio Ebata

This paper describes a tentative theory of Descriptive Dialect-Geography developed by the author.

The author proposes Descriptive Dialect-Geography has a combination of social linguistic study with a dialect geographical study.

はじめに

(1) 諸方言を貫く普遍性を求めて

気候や風土の相違によって、動植物の生態が異なる。あたかもそれは、地域ごとに、方言のちがいがあつたと似ている。脈々と、方言は子孫へ伝えられていく。方言は、人間共同体の内動力である。しかも、精神を地底から突き動かして止まぬものだ。

ゆえに、たとえば、日本の広島や山間地で話される方言とドイツのマールブルクの町はずれで話される方言との間に、人間としての共通の感覚や、言語法則が見出されるよう、試行したい。そして、諸方言に共通する普遍的な原理を探求していくことが、要請される。

(2) 記述方言地理学について

記述方言地理学という術語は、いまだ、洗練された名称とは言いがたいかもしれない。しかし、筆者は一地点の体系的な方言構造の記述を目的とする記述方言学(共時方言学)と、地理的空間の中で、多地点の特定方言事象の分布が歴史的に研究されることを目的とする方言地理学(通時方言学)とが、豊かに統合されるべく考えたいと思う。方言構造を求める考え方と、社会方言構造を求める考え方と、それらの方言の地理的分布事情との三つを統合したところに成り立つのが、記述方言地理学なのである。

I 言語地理学の胎動

言語地理学は、歴史言語学の一翼を担うものであり、学問の性質として、それは、言語史の再構を目的としてきた。

ところが、学問が進歩し分化してきたのに、定義が旧態のままである。それでよいかどうかは、再検討されなければならない。

1. はじめに「文」あり。— G. Wenker

西ドイツ、マールブルク大学のGeorg Wenkerが1876年に創始した言語地理学的研究は、40文の質問簿を通信調査によって求める方法で始まった。興味深いのは、物の名を聞くというやり方でなくて、以下のように、全ドイツの風土を反映していると思われる40文例の方言翻訳を企画した点である。結果として、文表現全体が回答された。その一つ一つの文表現の内容は、ドイツの風土をよく表していて、おもしろい。(ここに、原文のまま、掲出することにした。却って、それは、記録の働きも兼ねると考えられるからである。)

Die 40 Sätze Georg Wenkers für den Deutschen Sprachatlas:

SW: Die betreffende Abänderung des Wortlauts wurde für Elsaß-Lothringen, Baden, Württemberg und Bayern vorgenommen.

1. Im Winter fliegen die trocknen Blätter durch

- (SW in der) Luft herum.
2. Es hört gleich auf zu schneien, dann wird das Wetter wieder besser.
 3. Thu Kohlen in den Ofen, daß die Milch bald an zu kochen fängt.
 4. Der gute alte Mann ist mit dem Pferde durch's Eis gebrochen und in das kalte Wasser gefallen.
 5. Er ist vor vier oder sechs Wochen gestorben.
 6. Das Feuer war zu heiß (SW stark), die Kuchen sind ja unten ganz schwarz gebrannt.
 7. Er isst die Eier immer ohne Salz und Pfeffer.
 8. Die Füße tuhn mir sehr weh, ich glaube, ich habe sie durchgelaufen.
 9. Ich bin bei der Frau gewesen und habe es ihr gesagt, und sie sagte, sie wollte es auch ihrer Tochter sagen.
 10. Ich will es auch nicht mehr wieder tuhn.
 11. Ich schlage Dich gleich mit dem Kochlöffel um die Ohren, Du Affe!
 12. Wo gehst Du hin, sollen wir mit dir gehn?
 13. Es sind schlechte Zeiten.
 14. Mein liebes Kind, bleib hier unten stehn, die bösen Gänse beißen Dich todt.
 15. Du hast heute am meisten gelernt und bist artig gewesen, Du darfst früher nach Hause gehn als die Andern.
 16. Du bist noch nicht groß genug, um eine Flasche Wein aus zutrinken, Du mußt erst noch ein Ende (SW etwas) wachsen und größer werden.
 17. Geh, sei so gut und sag Deiner Schwester, sie sollte (SW solle) die Kleider für eure Mutter fertig nähen und mit der Bürste rein machen.
 18. Hättest Du ihn gekannt! dann wär es anders gekommen, und es thäte besser um ihn stehn.
 19. Wer hat mir meinen Korb mit Fleisch gestohlen?
 20. Er that so, als hätten sie ihn zum dreschen bestellt; sie haben es aber selbst gethan.
 21. Wem hat er die neue Geschichte erzählt. (SW?)
 22. Man muß laut schreien, sonst versteht er uns nicht.
 23. Wir sind müde und haben Durst.
 24. Als wir gestern Abend zurück kamen, da lagen die Andern schon zu (SW im) Bett und waren fest am schlafen.
 25. Der Schnee ist diese Nacht bei uns liegen geblieben, aber heute Morgen ist er geschmolzen.
 26. Hinter unserm Hause stehen drei schöne Apfelbäumchen mit rothen Äpfelchen.
 27. Könnt ihr nicht noch ein Augenblickchen auf uns warten, dann gehn wir mit euch.
 28. Ihr dürft nicht solche Kindereien treiben.
 29. Unsere Berge sind nicht sehr hoch, die euren sind viel höher.
 30. Wieviel Pfund Wurst und wieviel Brot wollt ihr haben?
 31. Ich verstehe euch nicht, ihr müßt ein bißchen lauter sprechen.
 32. Habt ihr kein Stückchen weiße Seife für mich auf meinem Tische gefunden?
 33. Sein Bruder will sich zwei schöne neue Häuser in eurem Garten bauen.
 34. Das Wort kam ihm vom Herzen!
 35. Das war recht von ihnen!
 36. Was sitzen da für Vögelchen oben auf dem Mäurchen?
 37. Die Bauern hatten fünf Ochsen und neun Kühe und zwölf Schäfchen vor das Dorf gebracht, die wollten sie verkaufen,
 38. Die Leute sind heute alle draußen auf dem Felde und mähen.
 39. Geh nur, der braune Hund thut Dir nichts.
 40. Ich bin mit den Leuten da hinten über die Wiese ins Korn gefahren.
- G. Wenker の40文を、今日の日本の方言研究界での、文表現本位に調査するときの典型文例と比較してみた時、それは決して見おとりがしない。先駆的偉業である。
- G. Wenker から Ferdinand Wrede へと展開する言語地図化の作業は、極めて科学的で、しかも技術的合理的に、資料が分析されている。(もとの「文全一体」を、未分析のままにとりあげるという視点へは、考えゆくはずがなかったのである。)
- 音法則の規則性の発見が、めざすところである故に、表現の発想法や文体差という深層の妙を分布図に描くことなどは、思いもしないことであったのか。それにしても、「文本位」に、調査されている点は、見逃してはならないだろう。

2. 言語科学としての徹底した合理主義

方言事象の徹底した合理的処理が、『ドイツ言語図巻』(DSA)の仕事の特色である。方言事象の変相に合わせて、符号が体系的に編成されている。たとえばそれは、G. Wenkerの後継者であるFerdinand Wredeによる以下の凡例製作で、察知することができる。(雑誌「Deutscher Sprachatlas – auf Grund des von Georg Wenker begründeten Sprachatlas des Deutschen Reichs und mit Einschluss von Luxemburg – in vereinfachter Form bearbeitet bei der Zentralstelle für den Sprachatlas des Deutschen Reichs und deutsche Mundartforschung unter Leitung von Ferdinand Wrede – Text zur 4. Lieferung, 1930」より)

以下の凡例では、40文例の中の第24番めの文中の、fest がとりあげられている。語音の変化と符号の変化とが、合理的に対応しているのが注目される。また、諸事象の微妙な音声変化を重視して、すぐには大ぐりの音韻論的な総括処理を行わない点などに、言語地図を科学地図にまで高めてゆこうとする崇高な精神が窺えるのである。

fest	/ feste	↘ faes	┌ feschte
└ feest, fest	∧ faste	↘ foas	
┌ fast	✓ früste	↘ foes	┌ fesched
└ faast, fäst	↗ faaste	↘ fais	┌ fösched
┌ füst	↗ feaste	↘ fa-is, fa(i)s	┌ fasched
└ fääst, fäst	✓ föste	↘ faws	└ fësched
┌ füst	↘ farste		┌ füsched
┌ füst	↗ ferste	+ fasse	┌ faasched
┌ faist	↘ faiste		
┌ feist		◇ fester	→ fesch
┌ feist	∧ fesde	◇ faster	→ feasch
┌ fäst	∧ fasde		→ fasch
┌ fost	∧ füsde	— fescht	
└ föst		└ feescht, fëscht	▲ wisse
┌ farst	↘ fes	┌ fascht	▲ wiss
└ föst	↘ fas	└ fäscht	▲ wissen
┌ fist	↘ faas, fäs	└ föscht	
┌ foast	↘ fos	┌ feascht	● firm
┌ feast	↘ foos, fös		▼ hart
┌ feäst	↘ fäs	┌ faschte	▶ keif
	↘ fääs, fäs	┌ fäschte	

1983年に、未完の『ドイツ言語図巻』は、装いを新たに、『簡約ドイツ言語図巻』(Kleiner Deutscher Sprachatlas)として、出版されはじめる予定である。

先のDSAの50,000地点からこの度6,000地点が選ばれ、コンピュータによる言語地図が製作されることになっている。

マールブルク大学では、Wolfgang Putschke氏とLutz Hummel氏が、G. Wenkerの遺志を現代に反映させた音韻地図を作成しつつある。地理的存在としての方言を、科学的に客観化した典型が、100余年もかかって、やっと完成されようとしている。これが、ドイツ語史を再構する好例の資料(宝物)であることを疑う人はいないであろうと思われる。

3. 「atlas linguarum europae」(ALE)

全ヨーロッパを射程に入れた一大企画である『ヨーロッパ言語図巻』の実際の活動を見て、そのスケールの大きさと、実施に至るまでの周到絶大な準備とに敬服した。

調査票は546項目で、「sun → rises → sets → moon → bad weather」の順に配列され、「… winter → spring → summer → autumn → last」で終わっている。天象地象、動植物、農耕具、調度品等も見える。人間生活一般の語句が選ばれている。

第二調査票では、親族名称、馬の体の部分名称、色の呼称等も見える。A. Weijnen氏や実質の仕事をつかさどるJoep Kruijsen氏の格別の手腕に、尊敬の思いを深くしたことであった。

4. 「アジア言語図巻」(仮称)のために

できれば、「アジア言語図巻」なるものを構想し、実施したいものである。そのために、アジアの島々の方言の記述的研究が、活発に推進されなければならないだろう。これは、筆者の手におえない、はかない夢でしかないが、大事な仕事である。

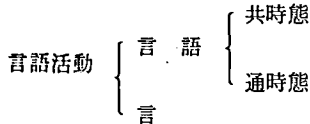
さて、DSAのように、ヨーロッパのドイツ語使用地域のみを調査して作製した言語地図には、言語地理学の方法下で、方言伝播の法則的事実が、導き出されよう。ところが、ALEや「アジア言語図巻」のような言語地図は特殊である。それらは、語族を異にする言語間での方言対照地図である。言語系統図の性格と言語地理学の分布図の性格との二つを併せ持つことになろう。このように、巨視的な新しい研究が出て、言語地図を使用する研究活動は、総合の時代を迎えよう。更に言えば、種々の言語地図が描かれて、言語が多面的、複合的に研究されるようになった、と言える。

II 記述方言地理学の理念と方法

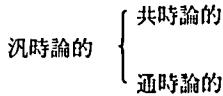
1. 弁証法的一元観

弁証法では、正と反との対立によって、両者に創造的営為が行われ、合への止揚統一が認められるのであった。

ソシュールは、『一般言語学講義』（小林英夫訳、岩波書店）において、言語研究のとるべき合理的形式を、



と認め、「二つの観点——共時論的と通時論的——の対立は、絶対的であって、妥協をゆるさない。」(117P)としている。しかし、ソシュールは、「汎時論的観点なるものがあるか？」(133P)という所で、いわば、



の考え方は、観点として立ちにくいとしている。仮りに汎時論的観点を認めたとしても、具体的事実には、言語価値が存せず、語の音それ自体があるばかりだと言う。

しかし、それに対し、亀井孝氏の明晰な反論が、次のように見られ、注目される。

「旧套を脱せざる文法が、すでに層を異にする高次共時論（下線は筆者）として昂められるには、やはり言語学自ら史的言語学の方法を悩みぬくことによって初めて可能であったのである。」

「各発達段階において常に体系的に展開してゆく言語は、ソシュールの否定するところであるにもかかわらず、歴史的逡閃のうちに内的関係を保って、自ら固有の法則に従ってゆくとみられる。（中略、筆者）ここにおいて、共時論は、再び新しい史的展望のうちに解消してゆく。しかし、この発展的な解消はブルトブルクの試みるがごとく、記述的立場を再びいはゆる旧来の史的立場へと妥協せしめることではなく、共時論の立場から通時論を止揚することによって、体系そのものの自己発展を記述する（下線、筆者）精神史的な言語考察の領域へ展開するものである。いまや問題は、共時態の時間的構造ではなく、歴史的構造としての共時態（下線、筆者）にあるであらう。」（以上二つの引用は、ともに、「共時態の時間的構造」『国語学論集—橋本進吉博士還暦記念論文集』昭和19年10月からのもの）

これと同じ考え方が、藤原与一先生にも見られる。いわゆる藤原方言学の学的体系は、『方言学』（昭和37年、三省堂）に開陳されている。また、『方言学原

論』（昭和58年、三省堂）には、高次共時論について次のように記していらる。

「分派論にしたがって、方言地理学を実践していくと、しぜんに、ことは方言通時態を見なおした高次共時態の認識に達していく。（——分派関係が、私どもにそうさせるのである。）方言地理学は、一方で、かならず、私どもに方言通時態の統一観をさそう。統一観は、歴史観であり、生命観でもある。かくして、この方向では、いわゆる言語地理学が發展的に解消され、高次共時態を正面の対象とする高次共時方言学が、そこにしぜんに誕生する。」(198P)

藤原与一先生は、先の『方言学』および『方言学原論』の中で、しばしば、亀井孝氏の卓見に言及しておられる。筆者は、お二方が、「高次の共時論」という同一思想をお持ちだと解している。そしてそれは、大変に尊い思想であると思うと同時に、いかにも東洋的な思惟だとも考えられるのである。

現実の諸現象の歴史的現在、時間の幅を持って認識される。そこで、弁証法的一元観は、人間現象を説明する手法（作業仮説）として、諸科学において、広く活用され、成功しているのである。

2. 共時態を包有した通時態としての記述方言地理学

方言地理学では、単語本位に比較することが多かったために、Word Geographyという名が栄え、個別現象を扱うことが、方言地理学（言語地理学）の本来の内実とさえ考えられたようだ。

それに対し、オランダのK.Heeroma教授が、母音体系を地図に描いて、体系比較を行ったことから始まった「構造言語地理学」の嚆は、1960年であった。その後、モルトン（1960年）やJan Goossens（1969）などが、共時態と通時態とを対立させて合一させたところの構造言語地理学を開拓し、発展させた。

筆者は、以上の「個と全」とを扱う通時方言学の傍に、「個と全」との発動された様態を問題とする記述方言地理学を考えたいと思う。人間は通時相において、パロルを発言する。しかし、その説明のこぼや、背後の体系への解釈は、結局、「個と全」との間の無限の距離を埋めるためのランゲージュ行為であろう。

たとえば、打消過去の言い方を、質問文に即して、「イカナンダ」と老女が回答したとしても、説明のことばとして、「老男は「イカランダッタ」や「イカヘナンダ」も使う。」と話者が答えることも予想される。従来 of 事象地理学（Word Geography）では、これらは「イカナンダ」を地図上に表して、その他は除くか、または脚注の形で表した。これでは、本当の言語状況

を正しく、表しきっていないと思う。おそらく、打消過去の言い方の体系を地図に表すことは、一つの方法として可能であろう。しかし、一事象のパロル的な発言にも、ラングへの志向が、行動として、全体的に表明されるわけだから、それらの社会的心理的全体を問題としてよいはずである。その柔軟なあり方を、記述方言地理学の射程にとりこんでいきたいものである。

筆者は、次下の若干の論文を、記述方言地理学の一実践として試行している(不十分ではあるけれども)。

○「中部地方城の方言の打消過去表現について」(「言語研究」73号, 1978)

○「中部地方城方言の推量表現の分布について」(「国語学」110号, 1977)

○「禁止表現の多元的分布 — 中部地方城方言について」(「国語学」125号, 1981)

3. 記述方言地理学は、「言語活動」の地理学

パロルに重きを置きつつ、ラングをねらい、しかも、ことばの剰余性、つまり、ランガージュを正当に問題とするのが、この記述方言地理学の本領とされる。構造言語地理学のように、体系を問題とすることがあっても、それを前面に押し出さない。ここでは、人間の偶然性や愚かさや社会性の一面が、言語の法則的なあり方に作用するありさまを注視するのである。社会的存在である人間の、場面に即して、気ままに振舞う実相が興味おかくとりあげられ、人間言語の生流転が、地理的な比較の下に記述される。

4. 記述方言地理学は、社会方言地理学である

記述は、共時態でのこととされる。共時態に時間の幅を認めるとして、そこは、人間の一定社会における方言行為の場である。それを地理的空間で比較するとすれば、記述方言地理学は、正に社会言語地理学の名と実とに符号する。方言分布の様相を、社会的人間の言語地層と重ね合わせて考察することをめざす記述方言地理学は、立体社会の言語人間学である。たとえば、一定地域社会の農業従事者のことばを方言調査し、同時に商業従事者についても同様の質問調査を実施して、広域の分布図を作成した上で、二つの分布図の様相を比較考察してみるのである。職業によるちがいが、分布差として明瞭に表れる項目もあれば、存外、一致するという場合もあろう。鎌やザルの変種についての名称や水稲栽培の用語は、商業従事者に慣じみのうすいものゆえ、共通語によく似た言い方が見られる可能性が予想される。商業用の貸借用語は、逆に、農業従事者に疎遠のものとされよう。このように、大小の社会内での個人言語の相違が集合して、方言分派や方言区

画が形成されている様を、別の視点でとらえ直してみるのである。社会学や経済学や地理学の領域内のことを、方言(言語)の立場で見貫くことになる。

また、年令層によって、方言が異なることは、誰もが意識していることである。それを、老少または老中少など、適切な区分のもとに、同一項目によって方言調査を実施し、分布図の比較を行えば、当然のこととして、方言の史的動向を読むことができる。それは、現在から過去へと歴史の再構を目途とする方言地理学のそれとは少しく違って、未来への展開をも予測しようという点に注目すれば、記述方言地理学の正当な方法の一つとして、位置づけられる方が妥当かと思われる。

社会内には、職業差、年令差などの、個人間を区別する要因がたくさんある。それらの一つ一つで、方言分布図を描き、それらをつき合せてみるのが、今後の課題であろう。「恒常要因」としての「性別差」「年令差」などによる分布図と、「可変要因」としての「地域差」「職業差」「階層差」「教養差」などの方言分布図とが、どのように類似し、どのように相違するかを考えると、未開拓の分野の広大さに驚かされる。方言分布図は、従来、主に、「地域差」「年令差」に注目して研究されてきた。もはや、自給自足の生活が見られなくなっている日本の社会では、外側から眺めて、一定の恰好な特定地域社会の景観の言語総体が、等質である、と考えることはできないであろう。その社会内に分け入って、複合する構造の実相を、記述していくことが要請されるようだ。

言語がそもそも、社会的な存在であるから、放て、社会言語地理学という言い方に立つことは、慎重であるべきだと考えたい。むしろ、言語社会の多面的なあり方を、個別比較、構造比較を含めて記述する方向で、包括的な記述方言地理学を発展させていくことが望ましいと考えられるのである。

5. 記述方言地理学の統合単位は、「方言会話」である

方言事象地理学の単位は、語(word)であった。文であることも稀にはあった。それを、方言体系を対象とする所にまで高めた学問が二つある。一つは、構造言語地理学であり、他の一つは、方言分派地理学である。これらは、理念において、比較方言学がめざしているところのもと、類似であろう。

しかし、私がここで考えようとする記述方言地理学では、それらとは、およそ違っている。それは、「方言会話」も、一つの単位体になる、と考える点である。長くも短くもあってよい「方言会話」の全人的表出

が、記述方言地理学的に比較されると、そこには、本来的に社会的動物としての人間の行状が活写され、折出されるはずである。それへの科学的分析の単位形態や手順は、今後の課題であるが、理念として、筆者は、それをこそ問題とすべきだ、と考えるのである。

6. 記述方言地理学から「会話行動方言学」へ

人間の毎日の言語生活は、朝のあいさつから始まって、就寝のあいさつまで、「会話行動」として実現される。その点で、生ある人間の営みであるから、必然的に「生活」とか「行動」とかの動きの一瞬一瞬において、方言が認められるわけである。

方言の生動的な存在のしかたを、あるがままにとらえようとすれば、時間と平面とを多面的に問題とする「会話行動方言学」という術語が、従来の「方言学」にとって代ってもよいと考えられてこよう。方言学は“地方の言語の学”であろう。地方差に力点を置いて、ここに独自の固有な城を築いてきた研究の歴史は、尊重されなくてはならないが、本質的に方言の存在を考えるならば、方言の社会的なあり様を、地理的側面から研究するというのが、正当ではないかと考えるのである。人間の原義が、群れを形成し、依存しあって存立するものであるとすれば、方言が、人間社会内でのように機能し、地理的な違いによる地域社会内で、また、どのように相違するかを考察することは、意義あることだと思われる。

生活の固定性は、人的交流や居住の自由、マスコミの発達などで、少なくなった。ここで、思いきって、「会話行動方言学」（または、会話方言学）の将来を展覧したい。生活のちがいを越えて、人間個人は、目的的行動をとるのである。それは、方言会話の行動であるにちがいない。その方言会話の全体を、地理的に比較考察したのが、記述方言地理学ということになる。そこには、社会の歴史も個人の歴史も渾融された、注目すべき生態が見られるであろう。

Ⅲ 記述方言地理学の内的構造

記述方言地理学の構造について、はじめに、内的構造を、次いで外的構造を考察する。

1. 個別事象分布図×関連事情分布図の記述

一個特定の方言事象分布図がある。これを、単に、Word Geographyの結果として、史的解決のみへ誘導しないことが肝要である。必ず、話者の発言心理やその方言事象を使用する時の状況などとの関係を考慮し

て、方言行動の全体記述へと高められるべきである。当該事象の、地域内での存立状況の記述は、必ずしも体系的でなければならないということの意味しない。そこで筆者は、「群生記述」と言ってみるのである。「体系記述」が、乱れのない固定的な緊張関係の帰結であるとすれば、群生記述は、言語事象（言語形式）が群落集合をなして棲息する様の景観というのが、適当である。こうして、方言事象分布図が、群生記述と一セットになることが、一つの眼目である。

2. 方言体系分布図×話者のコメント図

方言の体系的事実を通時態において問題としたのは、構造言語地理学であった。記述方言地理学では、その静態レベルにのみ留まっていたはならない。話者のコメントを分布図に描くことによって、動態レベルを醸し、両者を重ね合せて、別の実態を醸成せしめるのである。いわば、構造と、それを覆し動かすものとの融合を、動的に透視するのである。ここにも、記述方言地理学の特異性は、別して、認められよう。

3. 方言分布史の依存関係図

諸方言分布図の史的関係は、区々に認められる。それらの結果が、内的関連を持って依存し合う状態を、網状組織図として描出しようとすれば、記述方言地理学の具体性が発揮されよう。たとえば、年令層による偏りよりも、文化の中心地からの距離の大小による方が、方言の変相に果す力が大きい、というような相関性が、帰納されたりするであろう。

諸々の方言および生活諸般の分布図が、地理的方言状態の解明のために参画し、依存関係が問題とされるのである。こうして、方言を社会生活の動きの相で、〈関係〉として、とらえてゆくことが望まれる。

Ⅳ 記述方言地理学の外的構造

方言事象分布図または、方言構造の分布図は、その他の人間的社会的属性（先述の「恒常要因」と「可変要因」を含む）の分布図と相関せしめられる。

そこで、記述方言地理学に生かされる人間的社会的属性の若干を、以下に書き出してみる。

1. 記述方言地理学の外的構造としての人間的属性

- ① 年層差
- ② 会話行動場面
- ③ 方言会話の位相
- ④ 方言会話の話題

- ⑤ 方言会話の目的性
- ⑥ 性別
- ⑦ 個人の生活レベル
- ⑧ 居住
- ⑨ 職業
- ⑩ 交際圏
- ⑪ 婚姻

方言は、個人的であると同時に社会的事実であるから、以上の11の人間の属性は、それぞれ、多かれ少なかれ、話し手の方言の表現生活に関わりを持っているはずである。それらの属性の中で、仮りに、問題となった方言事象分布図の分布相が、どの属性に最も強く影響をうけているか、という点などは、依存関係のありようを、細かく解析していかなくてはならないであろう。

2. 記述方言地理学の外的構造としての社会的属性
ここでは、社会そのものと、社会への認識との二つがある。それらを区別せずに、列挙してみよう。

- ① 社会の型
- ② 一元化志向社会と多元化容認社会
- ③ 待遇構造
- ④ よそ者と生え抜き
- ⑤ 社会習慣
- ⑥ オカミ(公)への意識
- ⑦ タブー
- ⑧ 閉鎖性と開放性
- ⑨ 経済的立地性
- ⑩ 言語抵抗
- ⑪ 政治

これら以外にも、社会的属性は、種々に考えられよう。あまりに広げすぎると、方言学が、固有の学問としての独自性を失うおそれがある。他の隣接諸科学の成果に依存しなければ、研究が進められない、というのでは、本来の一個の学問らしさが弱い。方言という複合的全体を分析し、研究しようとするばあいには、諸科学の英知を援用することは当然であろう。しかし、隣接諸科学の提示した結果を、さらに同様の方法でチェックすることによって確かめるという作業は、方言研究者側にとって、殆んど不可能に近いわけであるから、まずは、方言的事実の依ることが、根本的に大事であろう。

以上に記した社会的属性は、どの程度に、方言分布相にあずかっているか、その実態さえ分っていないし、依存関係の分析法さえ開発されていない現状である。しかし、それらを直視し、方言の実態は複雑である、ということを目の前に提出することが先決であり、最

善であると筆者は考えるのである。「記述」方言地理学というのは、そのように、方言実態の地理的・時間的な様態を、人間的社会的なありようで集積せしめた統一的なもの、と行うことができよう。

おわりに

以上で、記述方言地理学の理論的基礎について小記した。まだ、十分に堅固な考えになっていない。強いて、学体系の図を表にして出すことをさしひかえたのも、後日に待つためである。

筆者は、記述方言地理学という名を、研究の新しい実質に冠してみたのである。これは、共時面と通時面との接点の学である。「両者を止揚する」という「止揚」そのことに、エネルギーを注がない。現実の方言の行動が、地球上の立地社会の影響を大きく受けている。それは、「地球方言学」という見地で考えるべきほどに、多面的である。今は今なりに、筆者は、日本の方言の分布相に、人間的社会的ありようを見てゆきたいと思っている。それは、すぐれて人間的行為なのである。時に筆者は、記述方言地理学は、共時面と通時面という時間を止揚・飛翔させた「人間態」というべきではないか、と考えたりもする。これは、あまりにも突飛であろう。しかし、記述方言地理学の基軸がくると回る部分に、個人や集団の方言が存在し「動いている」のではないかと直感する。いまは、それらの理論的基礎を成さしめた一端を記して、あとがきとする。
(1983.8.31)

参考文献

- 藤原与一 「方言学」(1962, 三省堂)
- 藤原与一 「方言学原論」(1983, 三省堂)
- 亀井孝 「日本語学のために — 亀井孝論文集 I」
(1971, 吉川弘文館)
- W・A・グロータース 「構造言語地理学の新方法」
(「方言研究年報」第7巻, 1964)
- ソシュール著・小林英夫訳 「一般言語学講義」
(1972, 岩波書店)
- エドワード・サピア著・泉井久之助訳「言語」(1957,
紀伊国屋書店)
- 柴田武 「社会言語学の課題」(1977, 三省堂)
- Günter Bellmann; Deskriptive Sprachgeographie in
der Gegenwart, 1982
- Peter Trudgill; On Dialect — Social and geographical
perspectives. Basil Blackwell, 1983

K. M. Petyt; *The Study of Dialect – An introduction to dialectology*, Andre Deutsch, 1980
J. K. Chambers, Peter Trudgill; *Dialectology*, Cambridge University Press, 1980
Hermann Niebaum; *Dialektologie*, Niemeyer, 1983
A. Weijnen; *Atlas linguarum Europae – introduction–*, Assen, pays-Bas, 1975

Ferdinand Wrede; *Deutscher Sprachatlas*, Marburg, 1929
Wolfgang Putschke; *Automatische Sprachkartographie – konzeption, problems und Perspektiven*, Germanistische Linguistik, Marburg, 1977